みんなで人権を考える「つなぐ」

TUNAGU II

そのだ　ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ―人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

荷の重さは

「疲れた者、重荷を負う者は、わたしのもとに来なさい」この言葉は新約聖書の「マタイ伝」の中の、一行である。この後「わたしのくびきは、負いやすく、わたしの荷は軽いからである」と続いている。

大学院のときの恩師・滝沢 克己先生の哲学・倫理学科のゼミで学んだ一コマである。宗教などに無知そのものの私は、「重荷を負って頑張り続けると、救われるところではなく、最後は倒れてしまうのではないか」という論調で即、反論した。思春期のころから母に反抗し続けてきて「生まれてきたくなかった」という私の思いの中の荷物は、頑張っても頑張っても、重かったからである。その議論の中、人それぞれが否応なく担っている人生の荷の重さそのものは変わらないけれど、その重さはその人の荷物の担い方で変わるという気づきがあった。

信仰など何もない私にも、気づきはやってくるものだと思った。私の身を軽くしたその一瞬の大切な気づきを、恩師のあたたかな人間性とともに、私は生涯忘れることはない。

先日、初めて、田川市の識字学級の人たちと長崎県の平戸地方に研修旅行に行った。ふるさと田川市には既に実家も母校もないのだが、この十数年、田川市のある識字学級に年に数回関わっている。その識字学級では年に一回の研修旅行が行われていて、今年は平戸のフィールドワークだった。

平戸は日本の中で、キリスト教に一番ゆかりのある街という思いで心ふくらませながら参加した。

スペイン出身のフランシスコ・ザビエルは東洋布教を志し、日本の各地で布教にあたったが、平戸には3回滞在し、熱烈に布教している。平戸の教会を身近で見たのは初めてだった。やや青みをおびた透き通るような白で、祈りの丘に空高くすっくとそびえ立つカトリック紐差(ひもさし)教会は人間の誇りと威厳に満ちているように見えた。どこまでも青く透きとおった平戸の海も、禁教の時代、平戸に渡ってきた潜伏キリシタンたちの多くの犠牲や思いが、どんなにか流された海であることだろうと思いながら、ミサのかすかな声を聞いた。

さらに、慶長14(1609)年に平戸オランダ商館が設立され、貿易額の増加によって寛永16(1639)年に造られた大きな白い石造倉庫がずっしりとときを刻み、海を見下ろしていた。途中、西暦年号を使っていることを理由に徳川幕府から破壊を命じられたが、370年余のときを経て復元されたという。皆で入館して、広い倉庫の中でタイムスリップした時間を過ごした。

古くから人の手で守られた書物や建造物には、数千年を生きぬいてきた膨大な言葉、人類の知恵や歴史がつづられている。

それらが、混とんとした現代社会に生きる私たちにヒントを与えてくれるかもしれない。

問 教育政策課

「世界人権宣言」と「世界人権デー」

12月4日～10日は人権週間です。第二次世界大戦では、世界で約6000万人の人命が奪われ、その惨禍の反省のもと、採択されたのが「世界人権宣言」です。昭和23(1948)年に国連で採択されたこの宣言は、その後の平和社会・人権尊重社会づくりに大きく影響を与えてきました。

採択された12月10日を「世界人権デー」とし、日本では、その前1週間を「人権週間」と位置づけ啓発が行われています。

本市も街頭啓発を行ったり、小・中学生の人権ポスターや標語を市内各施設に掲示したりします。地元の小・中学生の作品をコミュニティセンターに見に来られませんか。

筑紫野市人権尊重のまちづくりスローガン

自分が人からされたり、言われたりして、いやなことは自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。